

---

## Step by Step

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Step by Step

### 【Nコード】

N1636E

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

【光彦×哀】大人顔負けの推理力、抜群の運動神経を持つコナンに、光彦は強い憧れと同時にコンプレックスを持っていた。コナンのようになりたい。一度ぐらい勝ってみたい。そう思うようになった光彦は、コナンに球技大会での勝負を申し込んだ。コナンに勝てたら、それを一つの自信につなげて大切なことを彼女に伝えようと決心して。

拍手おまけ話あり

「ねえねえ、蘭お姉さん。結婚するなら誰がいい？ わたしはコナン君！」

「え！？」

「ちえ。コナンだよ」

我らが少年探偵団のアイドル、吉田歩美ちゃんの発言に、真つ赤になりながら毛利蘭さんと歩美ちゃんの顔を交互に見ているのは、少年探偵団のリーダー的存在の江戸川コナン君で、自分の名前が拳がらなかったことがっかりしているのが、少年探偵団の胃袋担当の小嶋元太君。

「そんなの決まってるじゃない。新一君よー」

そう言って、聞かれた本人よりも素早く答えたのは、蘭さんの親友である、鈴木園子さんです。

ボクは誰あろう、少年探偵団の頭脳、円谷光彦。

ボクたち少年探偵団のメンバーは、コナン君の自宅兼、少年探偵団本部の毛利探偵事務所に来ていました。

そこに、蘭さんが園子さんと一緒に帰ってきて、ブライダルショーに行くという話になり、歩美ちゃんの交渉の結果、ボクたちも一緒に連れて行ってもらえることになったのですが……。

その話の流れで、歩美ちゃんは先ほどの質問を思い立ったようです。

ボクの推理では、これは蘭さんに対するけん制ではないかと思うんです。ええ。

だって、歩美ちゃんはコナン君のことが好きだから……。

ボクは、みんなの話を黙って聞いている少女に視線を向けた。

灰原哀さん。彼女はコナン君のことを、どう思っているんでしょうか……。

コナン君と灰原さんは、よく二人にしか分からない会話をしています。

お互いに分かり合っているような雰囲気をかもし出し、とても大人っぽくミステリアスで……。ボクはただ遠くから見つめているだけの傍観者……。二人の間には、決して足を踏み入れることのできない壁を感じるのです。

それはとても悲しい。

そしてコナン君のように、彼女の役に立てない自分がとても腹立たしい。

コナン君を信頼しきっている彼女を見ると、「ああ、コナン君のことが好きなのかも」と思って胸が苦しくなってしまうのですが……そのコナン君はというと、十七年上の蘭さんのことが好きだと分かるからホッとしたりもして……。

こういった気持ちを分析した結果、ボクは、彼女が好きなんだと思います。

最初は、歩美ちゃんが好きでした。いや、今でも好きは好きです。けれど、灰原さんが転校して来て、彼女と一緒に行動するうちに、

ボクは彼女のことを気になってしかたがなくなっていました。

歩美ちゃんは、かわいい。

誰が見てもそう言うと思います。

黒い大きな瞳は好奇心に満ち溢れてキラキラしているし、肩までの黒髪をリボンやカチューシャでとめた姿はお姫様のようです。明るく元気いっぱい、負けず嫌いなところもチャームポイントですね。

灰原さんは、かわいいというよりは、きれい。

印象は、歩美ちゃんとは正反対だと思います。

歩美ちゃんが太陽に愛されたお姫様なら、灰原さんは月に愛されたお姫様……そういった感じがするんです。

肩でそろえられた赤みがかった茶色の髪は、形のいい頬を縁取りその美しさを引き立てているし、切れ長の目元や引き結ばれた口元には、彼女の意思の強さを感じます。

ボクは、彼女のキツイ言葉の裏に隠された優しさや、さりげない思いやりが付くたび、彼女に惹かれていきました。

何かに怯えている様子をみると、守ってあげなきゃと強く思うのですが、そんなとき彼女が救いを求めるのは、決まって……コナン君なのです。

同じ小学生なのに……。

わかっています。彼がすごいのは。

同じ年だとは思えないほどの知識量、推理力、行動力、何をしても彼にかなうものではありません。もしかしたら、高校生でも彼に

かなう人は、なかなかいないのではないだろうか。

西の高校生探偵、服部平次さんとても仲が良いようですし、そんな大人びた彼の、恋の対象が蘭さんだというのもうなづけます。

蘭さんはコナン君の居候先のお嬢さんで、帝丹高校の二年生。きれいでスタイルも良く、とても優しく、そんじょそらの男なんて敵ではないくらい強いのです。

その蘭さんは、東の高校生探偵と言われる工藤新一さんの恋人なので、コナン君の恋が叶うのは厳しいんじゃないかと思うのですが、恋人の新一さんは難しい事件とやらを追っていて側にいないし、いつも側にいて蘭さんを守っているのはコナン君だし、蘭さんもコナン君を頼りにしているみたいだし、もしかしたらもしかするんじゃないかとも思っていたりするんですが……。

まあ、ボクとしてはコナン君と蘭さんがうまくいってくれたほうが喜ばしい訳です……って、なんていう不純な動機なんだ。ボクってやつは……！

あ。

こんなことを考えている場合ではありませんでした。話が流れてしまふ前に聞いてみなければ。

こんなチャンス、もうないかもしれないんですから。

ボクはごくりと唾を飲み込むと口を開いた。

「は、は、は、灰原さんは……考えていたりしますか？」

「何を？」

「け、け、け、け……結婚ですよ」

「興味ないわ」

「そ、そうですね。ぼく達まだ小学生ですもんね。アハハ……」

灰原さんは肩をすくめて、本当に、本当に興味がなさそうに答えたのでした。

あまりの即答ぶりに呆然としてしまいましたが、これで「ああ、江戸川君かしら」と言われていたら立ち直れなかったかもしれないので、これで良かったのかもホッとしたりして。

ああ、なんて複雑な男心でしょう。

「蘭お姉さん、本当に、本当に、新一さん？」

「もちろんよー」

「園子ったら、なんでそうなるのよ」

「またまた、テレないの！」

「て、照れてなんかなくてば。あんな大バカ推理之介なんてっ」

「まーったく、アヤツは何やってんだろっねー。健気に待ち続けるかわいい蘭を置いて。ぼやぼやしていると、他の男に持っていかれちゃうわよ」

「本当だよ……何やってるの。新一さん……」

ボクの葛藤をよそに、歩美ちゃんの攻防はまだ続いているようです。頑張っていますね、歩美ちゃん。

ボクも頑張らないと……って、どうやって？

ボクがああでもないこうでもないと考えていると、蘭さんは困ったような、今にも泣きそうな、そんな複雑な表情をして言ったのでした。

「本当……、何やってるんだろっね、新一。そうだ、コナン君が大

きくなるの待つちゃうかな……。ね、コナン君」

えええー！！！！！！！！！！！？？

ほ、本気ですかっ、蘭さん！！

ボクはとつさに灰原さんに目を向ける。

彼女は一瞬驚いた表情をすると、鋭い視線を蘭さんに向けたのでした。

「ダメ！ 蘭お姉さんダメ！ コナン君はダメ」

「そっか……。じゃあ……。キッドにお願いしちゃうかな」

「えっ！？」

「あー、それはダメダメ。キッド様は、わ・た・し！」

蘭さんの発言に真っ赤になったり、真っ青になったりしているコナン君。

コナン君を見て微笑んでいる蘭さん。

蘭さんをじっと見つめている灰原さん。

そんな三人を見ている、ボク。

知らない間に胸元をつかんでいた手に力がこもる。

心が、どこにあるのかなんてわからないのに、どうして胸が苦しくなるんでしょう……。

不意に、こちらを振り向いた灰原さんと視線がぶつかった。

ボクは気持ちを読み取られないよう、必死に平静を装って彼女を見つめ返していたのですが、探るようなブルージェーの瞳に見つめられ、ボクの仮面は簡単に剥がれ落ちて、ついに瞳をそらしてしま



いました。

ダメだ。

見透かされてしまう。

彼女の心の中を覗いてみたいけれど、その前にボクの方が全部見透かされてしまう。

灰原さんに好かれない。

灰原さんの支えになりたい。

灰原さんに頼りたい。

何か一つでもいい。コナン君に勝ちたい。

勝って、自分の自信につなげたい。

どうすれば……。

「あ、そうだ。コナン君。球技大会、応援に行くからね」  
「うん！」

はっとして振り向くと、蘭さんとコナン君が楽しそうに話をしていました。

……そのとき、ボクはひとつのアイデアを思いついたのです。そして、それを確実に実現するためにはどうすればいいのかも。

ボクは、コナン君が目を離れた隙に蘭さんに近づくと、彼女にそっと話しかけたのでした。

春に帝丹小学校では球技大会が行われます。

一年生から三年生までの低学年混合チームでの対抗戦、四年生から六年生までの高学年混合チームでの対抗戦で、種目は野球・サッカー・バレーボール・バスケットボール。

各学年の同じ組同士がチームになり、男女別にトーナメント形式で戦います。

それは秋の運動会と同じく、帝丹小学校のとても盛り上がる行事のひとつでもあるのです。

そんな球技大会の出場種目を決める日、ボクはある決意を胸にコナン君に話しかけました。

「コナン君、どの種目に出場するんですか？」

「ん？ サッカーに決まってるんだろ」

やはり。

「では、ボクもサッカーにします。……そこでコナン君。勝負をしませんか？」

「あん？」

コナン君は、意外そうに眉をあげると、すぐに自信をのぞかせた不適な笑みを浮かべた。

「まさかオメー、サッカーでオレに勝とうなんて思ってたんじゃないだろうな」

「そのまさかです」

「やめとけやめとけ。キャリアがちが……いや……とりあえず、やめとけ」

「逃げるんですか？」

「んだと？」

ボクは大げさに肩をすくめてみせる。

そこには元太君や歩美ちゃん、そして灰原さんも集まって来ていました。

「勝敗を決めるのは、得失点数。これにオリジナルルールを適用して、アシストも1点とカウントします。これで少しはボクにも可能性があるのでないでしょうか」

「ホー」

「それに……」

ボクはコナン君に微笑んでみせた。

「勝った方には蘭さんから贈り物がもらえます」

「はあ？」

コナン君はポカーンと口をあけていましたが、すぐに眉間にシワを寄せて「何で蘭が……」とブツブツ言いながら考え込みはじめました。そしてみるみる真っ赤になると、一瞬刺すような鋭い視線をボクに投げかけてから、そっぽを向いて答えたのです。

「……しゃーねえ。勝負に乗ってやるよ。言っとくけど、手は抜か

ねえかな」

「望むところです」

「蘭姉ちゃんの手づくりうな重かあ……、よし、オレもその話乗っ  
たぜ！」

「はい？」

「はあ？」

元太君の一言に、ボクとコナン君がキョトンとしていると、もう  
我慢できないとばかりに、歩美ちゃんが「どうして勝負するの？」  
と聞いてきたので、ボクはチラツと灰原さんを見てから答えました。

「男には勝負が必要なきがあるものですよ」

「そうだぞ、歩美。男には必要なときがあるもんだ」

いや、元太君には勝負を申し込んでいませんから。

「なんてったって、うな重がかかってるんだからな！」

ひとつことも『うな重』なんて言ってませんよ。

ボクが呆れた顔をして元太君をみると、灰原さんが意味あり  
げな微笑を浮かべて口を開きました。

「まあ、いいんじゃない。面白そうだし。男三人、勝利の女神から  
の贈り物を賭けて頑張んなさいな」

ボクの勝利の女神は、あなたですよ。灰原さん。

「頑張ります」

「負けるかよ」

「ねえねえコナン君。蘭お姉さんからの贈り物って、何だと思ったの？ うな重じゃあ、ないよね……」

「……知らねー」

「えーっ、ウソ。コナン君知ってるから勝負を受けたんでしょ？」

「ちっ、ちげーよ。蘭が何を贈ろうとするかなんて、わかるわけねーだろ！」

「”蘭！？”」

「あ、いや……らん、ねーちゃん……」

コナン君を勝負の舞台にあげることのできた、蘭さんの贈り物とはなにか。

歩美ちゃんの疑問はもつともで、ボクとしても気になるところでしたが……コナン君と勝負できるということで満足していたので聞かないでおいてあげました。

あの日から、ボクは放課後に毎日練習するようになっていました。最初は一人でしたが、元太君と二人で練習するようになり、そこに「光彦が本気で頑張ってるんだ。オレが遊んでるわけにはいかねーだろ」とコナン君が加わり、そのうち同じチームのメンバーが集まってきました。

そうしていると、だんだんとボクたちの勝負がどのより、一緒

に練習をしているみんなと「勝ちたい」と思うようになり、チームワークが見違えるほどよくなってきました。

そしてボクたちのその熱気は、じわじわと全校に広がり、球技大会は今までにない盛り上がりを見せてきたのでした。

「どうしてそんなに頑張るの？」

サッカーの練習中、ボクがひとりで休憩していると、灰原さんが話しかけてきました。

あなたに振り向いて欲しいからです。などとは言えず、言いよどんでいると、灰原さんは小さく首を横にふり、ため息をひとつついたので。

「彼女のが好きなら、悪いことは言わないわ、憧れだけに留めておきなさい」

「えっ？」

「彼女には、すでに王子様がいるでしょう。彼らには敵わないわ」

「ああ、コナンさんと新一さんですね。大丈夫、違いますよ。ボクが好きなのは蘭さんではありません」

「あら、そう」

灰原さんは意外そうに眉を上げると、探るような視線をボクに投げました。

「じゃあ、どうして？ ……なんて、聞いてもいいのかしら」

「ボクが蘭さんに贈り物をお願いしたのは、コナン君と勝負をしたかったからです。そして、ボクがコナン君と勝負をしたかったのは、彼に勝つことで自分の自信につなげて、もっと成長したいからです」

あなたに相応しくあるために。

「……すれてんのかしら」

「えっ？」

「いえ、何でもないわ。もっとドロドロした理由を想像してたから」

「はあ」

「で、そういうのは、いいわね」

「えっ」

「頑張って」

「はっ、はい！」

灰原さんは目を細めると、とても魅力的な微笑をボクにプレゼントしてから去っていきました。

彼女に笑顔で応援されたという事実は、ボクの頬をゆるめさせるだけではならず、すっかり舞い上がらせていました。ですから、その後に参加した練習を灰原さんにみられなくて良かったと、心の底から神様に感謝しました。

見上げると空は高く、その青い青いキャンパスには風に押された雲が薄く広がり、太陽はその存在を隠されることなくさんさんと光をそそぐ。球技大会はそんな絶好の運動日和に行われました。

日頃の練習のたまものか、ボクたちのチームは順調に勝ち進み優

勝することができました。

MVPは江戸川コナン君。

今頃彼は、蘭さんからの贈り物を手にして喜んでいることでしょう。

一緒に頑張ったみんなと優勝したかったのは確かですし、ボクたちの勝負のことは後回しであつたので、こういう結果なのは十分に予想できてはいたのですが……やはり悔しいです。

ボクとコナン君の、勝負の上での点差は2点。

「あーあ。やっぱり……何をやっても叶わないのでしょうか……」

思わず口にして、ごろんと芝生に横になったところに「そうね」という声が振ってきました。驚いて目を開けると、そこには灰原さんの大きな瞳があり、ボクと目が合いました。

「うわああああああ。はっ、灰原さん……」

彼女は、慌てて起き上がったボクの取り乱し様など全く意に介さないようで、そのままストンと隣に座りました。

「いいんじゃないの」

「え？」

「比較なんてしなくても」

「……」

「誰かと比べる必要なんてないわ。誰かのようになりたいと努力するのは素敵だけど、誰かと比べて落ち込むなんてばかばかしい。円谷光彦は円谷光彦なりのいいところがちゃんとあるじゃない。そう



ね、例えば……チャンスはあったのに、チームのために江戸川君にボールを集めたところとか」

「灰原さん……」

「私は好きだけど？　そういうところ」

灰原さんはそう言うと、優しい瞳をボクに向けたのでした。そして思い出したかのようにクスクスと笑い出しました。

「わざわざ、江戸川くんが本気を出さざるをえないように、蘭さんをダシに仕組む辺り……正々堂々としていて好感が持てたわ」

灰原さんがボクの隣で笑ってくれている……。

それはボクの全身を幸福感で包み込み、熱に浮かされたように、言うはずではなかった言葉を口にさせていました。

「灰原さん、いつか、ぼくがコナンくんに勝ったら、聞いて欲しいことがあるんです」

「なに？」

「あ、いや、だから、ぼくがコナンくんに勝ったら……」

「バカね。」次”がいつあるかなんてわからないじゃない」

「え……ボクなんて、勝てるわけがないということですか……」

灰原さんのストレートな一言は、ボクの心をえぐるには十分で……落ち込んでいると、彼女は「ごめんなさい。違っの」と首をわずかに振った。

「そういうことじゃないわ。明日、江戸川くんが事故に合うかもし

れない。明後日、わたしが転校してしまうかもしれない。伝えたいことがあるのなら、伝えられるときにしなさい。後で後悔しても…取り返しはつかないのだから……」

そう言つと、彼女はとても苦しそうに瞳をそむけたのでした。

「灰原さん……」

「で、なに？ 大切なことじゃないの？ それとも、どうでもいいこと？」

「あ、いや……大切なことなんです……」

「なら、はつきり言いなさい」

こんなにもボクに灰原さんの考えを伝えてくれている、試合終了後ボクを探して来てくれた。

その彼女の行動は、何か理由をつけないと出来なかったこと大切なことを伝える勇気をボクに与えてくれました。

「あ、はい……。あの……、以前『結婚したい人』の話題になったの覚えてます？ そのとき、灰原さんは興味ないって言っていましたよね」

「ええ」

「それで、ですね……ボ、ボクなんてどうですか？ お買い得ですよ。絶対損はさせません。後悔もさせません。幸せにしてみせます！ って、いつか、自分に自信が持てるようになったら言おうと思つていたんですが……。子供のボクが言つても全然説得力がありません……よね……」

想像もしてなかったことを言われたのでしょうか、灰原さんは目をまん丸にしてボクを見つめていました。が、ふっと口元を緩めると

「そうね」と微笑んだのです。

「やっぱり……」

「……考えとくわ」

「え？」

「ほら、いくわよ」

灰原さんは立ち上がり、ボクに手を差し伸べていました。

見上げた彼女の顔は、見たことのないとても甘く優しい表情で、ボクは彼女の手をとるとギュツと握り締めていました。

「後悔させませんよ」

「十年経つても同じことを言えるかしら？」

「当然です」

「……………」

ボクたちは、どちらからともなく笑い出し、ひとしきり笑い終わると、みんなの待つグラウンドへと歩き出しました。

大丈夫。

ボクは逃げません。

あなたの抱える闇がどんなに深くても。

この手を絶対に離しません。

（後書き）

「14番目の標的」や「戦慄の楽譜」でも描写がありました。光彦の「灰原さんが好き」という気持ちが多まらなかつた。この二人がうまくいくといいなあと思つて書きました。

が、ついついコナンを知らない人でも読めるようにと書いてしまつて説明が多くなつてしまつて……。

割り切つたショートショートを書けるように練習しなければと思つ今日この頃です。

楽しんでいただけると嬉しいです。

拍手おまけ話あり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1636e/>

---

Step by Step

2010年11月27日20時30分発行